

議長 局長 補佐 係



平成28年12月21日

鹿追町議会議長 埴 洸 賢 治 様

こども園建設等調査特別委員会

委員長 加 納



所管事務調査報告書(最終報告)

本委員会は、下記のとおり調査を終了したので報告いたします。

記

1. 調査期間 平成28年9月20日～12月21日
2. 調査項目 こども園建設等に関する調査
3. 報告者
委員長 加 納 茂
副委員長 台 蔵 征 一
委 員 安 藤 幹 夫
吉 田 稔
狩 野 正 雄
川 染 洋
上 嶋 和 志
畑 久 雄
武 藤 敦 則
山 口 優 子

4. 調査（会議）経過について

平成28年 9月20日 こども園建設等調査特別委員会設置

平成28年 9月30日 こども園建設等調査特別委員会

平成28年10月21日 視察

上士幌町認定こども園

社会福祉法人大谷菩提樹会木野南保育園

音更認定こども園

平成28年11月10日～11日

視察

社会福祉法人知進会あすかの森認定こども園

学校法人太陽学院認定こども園太陽こころ幼稚園

るすつ子どもセンターぽっけ

平成28年12月 1日 こども園建設等調査特別委員会

平成28年12月 7日 こども園建設等調査特別委員会

5. 調査結果

(1) 上士幌町認定こども園ほろん（上士幌町）

施設は、幼保連携型認定こども園、子育て支援センター、（地域交流施設）地域サロンが一体となった複合施設である。地元産のカラマツ材を利用し、北海道森林整備加速化・林業再生事業補助金を活用した木造平屋建ての建物となっている。

建設にあたり、計画の段階から保育課職員、子育て支援センター利用者、保育所保護者にそれぞれアンケートを実施、保育課職員にワークショップを3回、保護者説明会、町民説明会、町民ワークショップ、パブリックコメント等町民との対話を重視してきた。

ふるさと納税の基金活用により保育料を無料化したことによって、0歳～2歳児の子供が増え、さらに移住者の子ども20人以上が入園してきたので、当初の想定を上回り、0～2歳児クラスは定員オーバーという状況である。子育て世代が多く移住してきているという好事例は、さらに研究していく必要がある。

児童の安全確保や不審者侵入予防のため、玄関や搬入口は電子錠と手動を併用しているが、午後3時半以降はずっと解錠の状態となっており、保護者や職

員にICカードを持たせる等の対応策を検討しなければならない。

送迎用駐車場はワンウェイ方式（一方通行）で、車がバックをしないようにするとともに、配置に余裕を持たせる等安全性に配慮している。

絵本コーナーは、迎え時に親子が交流する場となっているが、未満児の午睡の妨げになっているので、幼稚園型の迎えの時間を考えた配置や騒音に対する配慮が必要である。

遊戯室は広さが足りず、学習発表会は総入れ替え制にしないとできない。また、事務所の応接スペースや、職員更衣室、職員休憩室等は実際使ってみると広さが足りない部分もあり、そのあたりも十分検討する必要がある。

（２）社会福祉法人大谷菩提樹会 木野南保育園（音更町）

施設は、民間の建設によるもので経費抑制の工夫がある。職員室からよく見えるように遊戯室を中心に各部屋を配置しているのもその目的と言える。また年少エリアを分けて配置しているなど動線や配置に工夫が感じられた。また子育て支援センターが備えられており、玄関は別になっているが内部では行き来がしやすい動線である。

年間を通して一定である地中温度を冷暖房エネルギーとして利用する、地中熱ヒートポンプ、地中熱対応水冷式ヒートポンプチラーを使用している。光熱費年間20パーセントの節約になっている。廊下が少ない作りとなっている。各部屋から外への出入りができるテラスが設けられており、夏場の日よけにもなっている等、さまざまな手法で建設費や光熱費が抑えられていることが特徴的である。

また送迎の際、駐車場から反対側にある玄関までの短い距離であるが屋根付きの通路があり、そこを親子が手をつないで登園する等コミュニケーションがとれるよう配慮されていた。

民間ならではの建設費や光熱費等の経費節減の考え方についても参考にすべきである。

（３）音更認定こども園（音更町）

施設は、平成28年4月に開園した新しい施設である。職員室を中心に一般保育室、遊戯室、支援センターを見渡せる平面設計である。

210人収容、敷地面積9,498平方メートル、建物1,991平方メー

トルと広大で外に運動会等に利用できるグラウンドがあり、今回の視察では一番大きな施設である。床暖房によるはだし保育で、空調設備など備えた温かい施設作りが伺える。

大きい施設のため動線が長く、多くの職員を必要とするが、安全安心を追求、施設内を広くし、温かくすることを重点とした。

南側にサンルームが配置されており、明るく、事務室を中心に、その回りに保育室、玄関、遊戯室、厨房等の配置が良いと感じる。木の温もりが感じられ、本棚も随所に設置している。下駄箱は低い位置にあり、2段式で長靴、短靴がともに入れるようになっている。

同施設は、南側の長いサンルームの活用と送迎者が園児を送り迎えできる部屋があるのが機能的であった。

(4) 社会福祉法人 知進会 あすかの森認定こども園 (江別市)

施設は、江別市が昭和26年初の保育園として開設し、平成23年民営化、平成24年新園舎改築、平成28年認定こども園に移行しており、子育て支援センターも併設している。

環境は、自然に恵まれた飛鳥公園に隣接しており、夏は崖のぼり、冬はおしり滑り等、体を使う遊びができる。屋上にはプールハウス、園芸ができるウッドテラス等、自然環境に併せた施設の充実に努力している。自然の中で五感を豊かにして遊ぶ保育を目指している。

構造は、2階建で0～2才児が1階、3～5才児が2階、屋上にプールが設置されている。暖房は全て電気、太陽パネルは売電のみ、全室床暖を取り入れ、一年を通してはだし保育である。玄関を入れて正面に大きな明り取り、2階まで天井いっぱい窓を取り付け、広い芝生の園庭が窓越しに目に入る。全室エアコン対応、空気加湿清浄機を全室取り付け除菌と臭い対策も行なっている。水道の蛇口を全て自動にすることで水道の無駄を少なくしている(月/6万円)。電気温水器を3階に設置し深夜電力を利用している。手洗場のシンクを蛇口1個ずつ別々に設置したが、一体となったシンクの方が使い勝手が良かったとの事である。午睡にはベッドを利用していた。下駄箱は1人分の高さが低すぎて入らない靴もあるとの事。

発表会は2階にある遊戯室で、運動会は近くにある飛鳥公園で実施し、雨の時は近くの小学校の体育館を借りる。

芝生の広い園庭、公園での遊び、畑を耕して野菜を育て、ぬくもりある木製のおもちゃ等特色ある民間ならではの保育がされている。

(5) 学校法人太陽学院 認定こども園 「太陽こころ幼稚園」(札幌市)

太陽こころ幼稚園は、函館市に本部を置く学校法人太陽学院が運営する認定こども園であり、函館市に二つのこども園と札幌市内では、こころ幼稚園と他に二か所の小規模保育施設を運営している。

太陽こころ幼稚園は、幼保連携型の認定こども園であり、施設は平成22年、約1500坪の敷地の中に建坪360坪、総工費3億5,000万円で建てられ、平成23年に幼稚園として開園し、平成24年8月からは認可保育所も併設した認定こども園となった。

建物は、平屋のRC構造で玄関を入ると天井の高さ5メートルの広々とした遊戯場が目に入る。その中で一段下がったところに船の形をした職員室があり、壁が無い構造で先生たちは、職員室にいても子供たちの様子や、玄関の出入りにも目が届くようになっている。

悠々と魚たちが泳ぐ海をコンセプトとしており、日が良く入り明るく広々として開放的な遊戯場である。建物の両サイド(南北)に保育室等を配置し、中央に遊戯室等に廊下を少なくしスペースを有効に利用している。

暖房は、都市ガスを使ったボイラーで行われており床暖房も設備されている。視察したほとんどのこども園と同様にここもはだし保育を行っていた。

食事の提供については、自園調理で行っており5人の調理員で園児と先生、職員の分、合わせて300食を調理している。一食当たりの単価は、320円とのことである。食事は、みんなで「らんちる一む」で食べるようになっている。アレルギー対策については、代替え食の提供で3重のチェックで万全を期している。厨房は、盛り付けに使うスペースなどについては、狭く感じた。他の園でも使われていたが、高温のスチームで調理するスチームコンベクションオーブンの導入は、大量の料理を効率的に短時間で調理できると大変好評であった。

園児と保護者の全員が集まれる広いスペースは、無かったが発表会等については、札幌市の施設で行なっているとの事である。

すぐ側に老健施設があり子ども園との交流が年4回程あり、どちらもそれを楽しみにしており、双方とも意義あるものとなっているとのことである。

(6) るすつ子こどもセンターぽっけ（留寿都村）

この施設は、築後37年が経過している老朽化した保育所の建て替えを行なったもので認定こども園ではない。

同施設は、児童福祉中核施設として機能する保育所、子供支援センター、一時保育事業、放課後児童クラブ、小型児童館の複合施設として建設された。保育所の定員は80人で現在は64人受け入れている。

併設されている子育て支援センターは、村内に在住する就学前の児童と保護者等を対象としており、昨年平成27年度からスタートした事業で、保護者が緊急の用事や病気の際に、児童を一時的に保育を行うもので、事前に登録が必要である。

放課後児童クラブは、いわゆる学童保育事業であるが高学年の利用が可能であり多目的な体育館も備えている。この施設の整備により開設時間の延長等事業内容の充実を図ることができた。また、災害時の避難所として活用することも目的の一つである。

【施設の特徴】

①ゼロエネルギー化環境設備を基本計画に設計

- ・暖房は地中熱ヒートポンプ方式を採用
- ・換気は地中熱を利用するアースチューブ及び全熱交換型換気扇を採用
- ・給湯の機能アップに太陽集熱器を採用
- ・建物全体の断熱強化を高めるトリプルサッシ、断熱材の増量で気密性を高めた。

②構造材に道産木材を利用

③トイレ及び調理室は災害時用に作られている。

④災害時の避難所として使用のため建物の構造重要度係数を1.25と一般の建物の1.25倍の強度としている。

⑤その他非常用発電機、また非常用電源接続盤を設置し災害時に移動電源車の接続による暖房、電気の確保をすとしている。

6. こども園のあり方（まとめ）

【動線と光熱費を考えた健康的施設を】

今回視察した、すべての施設が床暖によるはだし保育が行われていた。これは現代のニーズであり、子どもの健康への配慮によるものである。

また、2園ではヒートポンプ、太陽熱、太陽光を採用する等、随所に光熱費等の経費節減対策が施されていた。

音更こども園では、保育室の南側に長いサンルーム（縁側）が配置され十分な光の取り込みと、遊戯室、午睡室としての利用が特徴的であった。

空調設備は各施設とも整備されており、冷房設備も全部の保育室に設置されている所と幼児室、調理室のみの所もみられた。

全館設備が望ましいと考えるが一部とするなら体温調節が難しい幼児期の保育室には必要であり、全体的に健康的施設が望まれる。

【建設面積と発表会場の考え方】

視察施設の中には収容人数からみて施設全体が狭いところがあった。補助金利用の関係で建物の大きさに制約を受けるケースもあるようだが、後の懸案材料にならないよう十分に検討する必要がある。

各施設の特徴として、廊下が少なく全体を見渡せる構造が多く、子供の安全に配慮している状況が見られた。設計上も床面積の無駄がなく効率的と思える。

また、プレイルーム（遊戯室）は子供が利用する上では十分と思えるが、発表会等に利用するには広さに制限があると感じる。本町のように町民ホール等の会場を利用するのであれば過大な大きさにする必要はない。

建設面積は動線等を工夫し廊下を減らすほか、調理室も含め、機能的かつ将来に対応した総合的視点が必要である。

【安全・安心な施設を】

外の遊び場、園周辺にフェンスが必要である。安全、防犯面でのセキュリティは重要な要素である。モニター設備は、外部侵入者対策及び建物内部での活用など、トラブル対応にも効果的である。施設周辺車道、駐車場、保護者送迎動線も含め、安全・安心な環境と設備を整えた施設であるべきと考える。

【未来志向の施設を】

本町のこども園建設にあたっては財政面や補助金の制約を受けるが、建設検討委員会の答申を踏まえるとともに、保護者や現場関係職員の声を取り入れ、将来に向け長年利用することを念頭に入れ、子どもたちが毎日通いたくなるような工夫をソフト面はもとよりハード面からも楽しい雰囲気を作り出し、健康的で機能的な園舎作りが必要である。